

乳児期の「自己肯定感」の研究

今津 香

キーワード：乳児、自己、主体性、自尊感情、自己肯定感

1, はじめに

私の子育ての経験から、子どもは「オギャ」と声をあげてこの世に誕生したときから、一人の人間として、主体性を持ち立派な生命体として存在していると考えます。個人差はあっても、生後2カ月程度で別の部屋に寝かされると「アーン・アーン」と家のものを呼び、心地よい気分時は「ウクン・ウクン」と声を出し、「気持ちいいの?」「そう」とリズムに合わせて声をかけて親子で応答していたのである。

そのような乳児期の応答関係や相互関係の中で、子どもは愛されている、大切にされているという実感を自然に持ち、繰り返し行われる情動交流の中で、自分の存在を肯定する気持ち、「自己肯定感」がはぐくまれているのではないかと考える。このことについては、2008年の保育所保育指針にも、乳幼児期からの「自己肯定感」をしっかりとはぐくんでいくことの大切さを、その解説書の中で詳述されている。

たとえば、保育の方法として、「家庭での生活と保育所での生活の連続性に配慮して保育すること」、「かけがえのない存在として、一人一人の子どもの主体性を尊重し、子どもの「自己肯定感」がはぐくまれるよう対応していくこと」が必要であり、重要であることが指摘されている。又、保育のねらいの解説には、「子どもが保育士などに受け止められながら、安定感を持って過ごし、自分の気持ちを安心して表すことができることは、子どもの心の基盤となります。周囲の大人や子どもから、かけがえのない存在として受け止められ、認められ、自己を発揮していくことは自分への自信につながります。保育士等が子どもを一個の主体として尊重し、主体として受け止め認めるという対応を通して、子どもは自己を肯定する心を育てていくのです。また、そのことにより保育士等や周囲の人への信頼感が育ち、一人一人がかけがえのない存在であることを感じ取っていきます。人との相互的な関わりにより育てられていくこうした「自己肯定感」を乳幼児期に育てることは、子どもの将来にわたる心の基盤を培うことでもあります。」とより具体的に記述されている。

2018年の保育所保育指針の解説書では「身近な人と気持ちが通じ合う」ねらいとして、次の3点が指摘され「自己肯定感の」大切さを取り上げている。

①安心できる関係の下で身近な人と共に過ごす喜びを感じる。②体の動きや表情、発声など

により、保育士等と気持ちを通わせようとする。③身近な人に親しみ、関わりを深め、表情や信頼感が芽生える。

又、「社会の中で生きていく人間として、子どもの発達において特に大切なのは人との関りである。乳児期において子どもは身近にいる特定の保育士等による表情豊かで受容的・応答的な関りを通して相手との間に愛着関係を形成し、これをよりどころとして、人に対する基本的信頼感を培っていく。又、自分がかげがえのない存在であり、周囲の人から愛され、受け入れられ、認められていることを実感し、「自己肯定感」を育んでいく。さらに安心できる関係の下で、自分の気持ちを相手に表現しようとする意欲が生まれる。こうした育ちは、生涯にわたって重要な、人との関わり合いながら生きていくための力の基盤となるものである。」と記述されているが具体的な育ちの姿として示されたものはない。

乳児の自己概念の研究は鏡像認知等、検討されているが、多くは小学校以上の自尊感情測定尺度や臨床的なものが多く用いられた報告が多い。そこで、筆者は仮説を立て、保育所の子どもが主体的に、行動している姿を観察し、乳児期の「自己肯定感」指標を作成してきた。それをもとに、保育士に該当するところに、複数人で○を記入して得点化を図り、あとで、保育士と対話を重ねながら乳児期の「自己肯定感」について研究してきたのである。

2. 乳児の自己の先行研究

「自己肯定感」を論じるにあたり、乳児の自己についての先行研究を見てみると、心理学では1世紀以上前から、自己、自我、アイデンティティ、自己概念、自己意識などをテーマに膨大な研究がおこなわれてきた。

玉置（1998）「人権保育のカリキュラム研究」を引用すると「乳児期に人間はどのような形で自己の感覚が育ってくるのかは、昔は鏡を使用していたが現在では写真・ビデオ等、視覚映像的自己研究がされている。この研究はハーター・アムステルダム・バーテンハル・梶田等がレビューを行っている。」と記述されている。前掲のp332のJames（1890）の分類によれば、自己には主体的側面と客体的側面がある。主体的側面はI（主我）とされ、知り、考え、行動する主体としての自己である。対して、客体的側面はMe（客我）とされ、対象化され、知られるものとしての自己である。同じくP338ではStern（1985）は、（2ヶ月～6ヶ月）の間であるが乳児は、ハンドリガードといって、自分の手を見つめる行為に示す姿がある。これは自己の身体的単位として体験し、主体としての自己感であると述べている。ちなみに客体としての自己はいつごろかという、一般的に18ヶ月以降子どもは自分を客体化し、言語の獲得と使用によって客体的な自己が確立されていくといわれている。これは現在の子どもの発達の様相を示している。

又、玉置（1998）によれば、「例えば、机を偶然とんとんとたたいたら養育者は同じよ

うにとんとなんとたたくという行為が実現してくると、自己を主体的な行為者とみなすということが出来るのは当然のことであろう。こうした主体を確認する活動を通して、乳児は自己が世界を支配しているという満足感も得られるであろう。(中略) 乳児が自己を確立するという時に「他者」の存在を前提にしてその関わりで検討しなければならないであろう。(中略) 最初の段階において身体活動であり、「自己の主体確認」があるということになる。その後に乳児は自己の身体の特徴を認知するのであって、逆ではない自己の行為が次の予期を生み出している。自分が自己の世界を支配している満足感、自分の活動がうまくいくかどうか自己評価も表れるはず(大人との関わり・・)。乳児期から自己の相当の部分が育っているのでは(中略)。少なくとも2歳までは活動を通じて自己の身体的な特徴を自己の中に蓄えていると研究の中からも言える。」と記述されている。

坂上(2012)「幼児は自己や他者に関する理解をどのように構築するか」では、1歳代後半に表象レベルでの自他理解が構築されると指摘されている。

植村(1979)は1歳すぎ「00ちゃんおいで」に正確に反応するようになる。1歳2ヶ月すぎ名前を呼ばれたら「はい」と言えるようになる。1歳6ヶ月すぎ自分の名前を言いはじめる。1歳7ヶ月すぎ「00ちゃんは？」と聞かれて正しく自分を指差すようになる。2歳1ヶ月ころから「00ちゃんが」と、おやつや食事を自分の名前で要求し始めると報告している。

一方、梶田(1988)は、「自尊心は、人のごく幼いころから現れる。たとえ2歳児でも、すでに彼なりの誇りを持っている。自分のやっている事に周囲の大人が手出ししたりすると、彼は、かな切り声をあげてそれに抗議し、自らの世界を主張しようとするであろう。こうした自尊心は、人が周囲の大人たちへの心理的依存から脱して自立への道をたどっていくうえで欠くことのできない基盤である。このことは青年期において、それまで親や教師など与えられてきた枠組みや規定、規範や価値観等々に対して、ことごとく疑問や違和感を持ち、悩んだり、反抗しながら一人前の大人として自立を図っていくという過程についても言いうることである。」と記述されている。

野沢(2011)は自己主張がなされる場合・1歳前半では発生による主張が特徴的・2歳前後にかけて不快情動の表出を示す行動が増加し、その後は減少する・2歳後半にかけて情動や行動を制御した発話や交渉的表現などより スキフルな自己主張が増加することが示唆された。

又、柏木(2012)では、「赤ちゃんの微笑みが無差別に起こっているのではありませんどのような対象が微笑みを誘発するかを調べた研究によりますと子どもの顔よりも大人の顔、それも無表情な顔でなく笑顔、声を出している大人に対して赤ちゃんの微笑反応はもっとも多いです。自分に関心を持ち笑顔や声掛けで反応してくれる大人が赤ちゃんには魅力があるのです。赤ちゃんの微笑みを受けた大人はその魅力に取りつかれ離れがたくなるでしょう。そして笑顔を返し言葉かけをする。さらには、何くれなく世話をして遊び相手になるでしょう。このように赤ちゃん自身は、無力、しかし、このように人を動かし、使いこなすという点ではまことに

有能と言えるでしょう。」と赤ちゃんの有能感について記述されている。

乳児の笑いについては多くの報告があり見聞きするところである。泣いたり、笑ったりして自己表現をしている。生まれてすぐ笑うことがあるが、しかしこの笑いは筋肉が緩んで笑う「生理的微笑」と言われるものである。でも周りは、笑ってくれたと思い、愛情いっぱいを受け止め、同じように笑い、微笑み返すのである。こうした行為により、子どもは受け止められたことにより安心感を覚え、自己がその時から始まっていると思われる。あやしたり、揺らしたりすると2ヶ月頃の赤ちゃんは、声を上げて笑う、この時の子どもの笑いは「社会的微笑」と言われ、周りの大人たちに、今までの苦勞はどこへやらと忘れさせてくれる程のものでもある。

3、乳児の「自己肯定感」の先行研究

次に乳児の「自己肯定感」についてみる。

高垣（2011）は「人が哺乳類の一員として肉体を持ってこの世に生まれてからの個人史の中に、自己肯定感を位置づけるなら、やはり「オッパイ」をくれる相手・母との関係が大きな意味を持たざるを得ない。母親の胸に抱かれて、オッパイをもらうその姿に、自己肯定感の源があるような気がする。母親に身をゆだねて、温かいまなざしに見守られながら、赤ん坊がおっぱいをもらうとき、赤ん坊は「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感の原型をもらっているように思えるのだ。その「記憶」がそれ以降の自己肯定感の核になっているに違いない。」と述べている。筆者も共感できる親と子の信頼関係が源であると思われる。

鯨岡（2011）は自己肯定感や他者への信頼という心の育ちの大切さについて「愛されているかどうか、大事に思われているかどうか、可愛いと思われているかどうかなど（心）が一人の子どもの心の育ちには決定的に重要です。なぜなら、その周囲の大人の思いが子どもの心の中に染み込む結果、自分は愛されている。大事にされて当然、自分は可愛いのだという形でその子の自己肯定感（自分は大事だという感覚）や自信や人への信頼感が育まれる。」まさしくその通りだと筆者も共感できる。

平野（2009）は「自己肯定感とは（自分の在り方や存在を受容し、肯定する気持ち）である。心理学では自己肯定感とはセルフエスティーム（self-esteem）の訳語の一つとして用いられる。セルフエスティームは自尊心・自尊感情・自己価値なども訳されるがそれは（自分が価値のある、尊敬されるべき、すぐれた人間であるという感情）という、どこか高みを目指す意味合いがこの熟語にあるから、自ら弱さやあやうさも含めて（ありのままの自分でいい）というニュアンスを強調する際に、自己肯定感が好んで選ばれるようである。・・・（中略）自己肯定感のような自己感覚は通常、意識の背景にあり実感されないという点で呼吸にたとえて説明される。・・・（中略）それでは、呼吸に対する空気に当たるものは何だろうか。それは周囲からの応答である。この応答はミラリングと呼ばれる。つまり周りの応答は自分を映し出す「鏡」なのである。私

たちは周囲の人々の言葉、表情、目の動き、声の調子、態度など「鏡」として確認するのである。」と記述されている。これは保育士等が、子どもを一人一人、大事に保育することで周りも仲間を尊重するのである。これは人権保育にとって大切なことである。

そこで、筆者は、玉置哲淳(1998)の「人権保育カリキュラム研究」p379に掲載されている「幼児の自己の構造と契機」試論の中に四つの構造と八つの契機を提案している(表1)。これを子どもの主体的行動と捉え、「乳児の自己肯定感の構造と契機」に置き換え、「自己肯定感」の検討してきたのである。(表2-1~5)

表1 幼児の自己の構造と契機

玉置哲淳先生の「幼児の自己の構造と契機」試論

| 自己の契機 自己の構造 | A 活動的自己 運動感 生活感 遊び | B 身体的自己 自分の 往、来感 ゆたかな体感 | C 物質的自己 自分の 色、梅も 物、服 お金の感覚 | D 社会的自己 1 対大人関係 それ 全通じた 文化 | E 能力的自己 | F 社会的自己 2 仲間関係、同伴者 社会的 アイデンティティ | G 精神的自己 気持も 往縁 信念など | H 全体的自己 |
|--------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|--|---|------------------|---|------------------------------|--------------|
| 1、支配感(自分の世界で) | 自分はこんなことを支配している(はず) | 自分の身体はこう動かせる(はず) | こんなものは動かせる | 大人とこうして遊べる(はず) | 自分の能力でこういふことができる | 友達とこうして遊べる(はず) | 自分はこんな気持もだからこんなことができる(はず) | 自分はよくや |
| 2、自己受容・既知の評価 満足・喜び 希望と課題 | 自分の活動に満足(失望)している | 自分の身体に満足(失望)している | 〇〇でいいと思う | 既、先生に満足(失望)している | 自分の能力に満足(失望)している | 友達に満足(失望)している | あなたはどんな気持の人ですか | 自分に満足している |
| 3、自尊感情(マリア・ボスツァイム) | 一のように活動はうまくいく方 | 身体には自信がある方 | 〇〇はやれる | 先生に気に入られる事が多い | 自分の能力に自信がある方 | 友達に気に入られる方 | 優美りやさんなど自分の特徴もっている | 自分の気持もに入っている |
| 4、可能的自己・自己期待 | こんな活動で遊ぶはず | こうすればかわいくなる | 大きくなったらこんなことができる | 先生とこれからうまくやれるはず | 自分はどんどん成長する | もっと友達がふえるいつもの姿にする | 将来自分はこんな人間になる | |

筆者は(表2~5)今津試案として作成したものである。「乳児の自己肯定感の構造と契機」として、活動的な自己の肯定感、身体的な自己の肯定感、物質的な肯定感、社会的な自己の肯定感1(大人)社会的な自己の肯定感2(仲間)、それら五つの契機で検討したのである。

4. 乳児の「自己肯定感」をはぐくむ構造と契機（今津試案）

以下の表2は、自己支配感 W で、A´は活動的な自己の肯定感、B´は身体的な自己の肯定感、C´は物質的な自己の肯定感、D´は社会的な自己の肯定感1、E´は社会的な自己の肯定感2を表した一覧表である。

表2—1 自己支配感 W

| | 年齢 | A´ 活動的な自己の肯定感 躍動感 生活・遊び | B´ 身体的な自己の肯定感 自分の性、容貌 身体の特徴 | C´ 物質的な自己の肯定感 自分の色、持ち物、服 自分の場所 | D´ 社会的な自己の肯定感1 対大人関係・それに通じた文化 | E´ 社会的自己の肯定感2 仲間関係、同伴者、社会的、アイデンティ |
|---------|--------------------|----------------------------------|--------------------------------------|---|---|---|
| 自己支配感 | 0歳 | ①快・不快を感じると笑ったり、泣く。 | ①手をかざす | ①安心できる居場所である。 | ①大人に泣く、笑う、微笑むと「どうしたの？」と受け止めてくれてうれしい。 | ①相手が泣くと自分も泣く。 |
| | く | ②排泄して気持ちがいい。 | ②抱かれやすい | ②明りの方に頭を向ける。安心する。 | ②オムツを替えてもらいながら声かけしてくれて、うれしい。 | ②互いに見つめ合って笑う |
| | 6ヶ月 | ③おっぱいを飲んで満足。 | ③乳房を捜す。 | | ③乳房を捜し、おっぱいを飲ませてもらって満足。 | ③そばの子によりさわる。 |
| | まで | ④衣服の調節の折、手足を動かす。 | ④首が据わったり腹ばいになる。 | ③快適な衣類等感覚的にわかる。 | ④衣服の調節をやさしく声かけ、してもらって嬉しく手や足を動かす。 | |
| | | ⑤機嫌よく声を出す。(クーイング)・喃語を出す。 | ⑤腹ばいになって頭をあげる。 | ④場所が違うと目できょろきょろ様子を見る。 | ⑤クーイングに答えてもらって嬉しい。(情動行動) | |
| 自分の世界でW | | ⑥好きな人をジーと見る。 | | ⑤一定の場所が落ち着く | ⑥親、先生に受け入れられて安心。(信頼関係) ⑦抱いてもらうとこちよくなる。 | |
| | | ⑦離乳食の味に驚く。 | | | ⑧初めての経験を互いに確かめあい食べると喜んでくれる。 | |
| | | ⑧自由に前、後ろと動くのを楽しむ。 | | | ⑨あやしてもらうと嬉しくて手足を動かしたり、ますます喃語を発する。 | |
| | | ⑨寝返りし、何度も自分でして遊ぶ。 | ⑥くると回転する。(寝返り) | | ⑩寝返りし、やった！と満足。「できたねー」と共感してくれて嬉しい。 | |
| | ⑩音を聞いたり、物を見たり、しゃぶつ | | | | | |

以下の表2-2は、上記の表2-1の続きである。自己支配感Wの6ヶ月～1歳3か月までの年齢を表記している。

表2-2 自己支配感（6ヶ月から1歳3か月）

| | | | | | | |
|--------|-----------|--------------------------------|------------------|---------------------------------|--------------------------------------|----------------------------|
| 自己支配感W | 6ヶ月～1歳3か月 | ①寒い、暑い等泣いて訴える。 | ① 足を持ったり自分を確かめる。 | ① 周りのおもちゃは自分のものだ。 | ① 「寒い？熱い？わかったよ」と受け止め、優しく衣類の調節をしてくれる。 | ① 顔をのぞきこむ。 |
| | | ②便が出ると気持ち悪く表情で知らせる。 | ② ハイハイして這う。 | ② 人の持っているものがほしい。 | ② トイレに行き、出たらほめてもらい嬉しい。 | ② すぐ隣の子に触りに行く。 |
| | | ③乳房を触りながら飲む。 | ③ 立てたー！とつかまり立ち。 | ③ 手で触るもので音を出して楽しむ。（畳、壁ふすまをガリガリ） | ③ 優しく「食べようね、おいしいね」と声掛けしてもらってうれしい | ③ 顔見知りの好きな年代の相手のところに寄っていく。 |
| | | ④半固形食が食べられるようになり嬉しい。 | ④ これ見よがしに歩く。 | ④物を落とし拾ってもらってうれしい。繰り返す。 | ④ 「かみかみ・もぐもぐ等声掛けしてもらい同じようにする。 | ④ 玩具の取り合いをする。 |
| | | ⑤喃語でしゃべる。 | ⑤ 鏡に映った自分の顔がわかる。 | ⑤好きなおもちゃがある。 | ⑤大人の真似っこをして楽しむ。 | ⑤ ボールなど転がし一緒に追いかける。 |
| | | ⑥ 見慣れない顔の人が来ると泣く。 | | | ⑥好きな人以外は泣く。（人見知り） | |
| | | ⑦ 好きな大人を追いかける | | | ⑦ ハイハイで近寄っていくと必ず抱いてくれる。 | |
| | | ⑧歩けるようになる。 | | | ⑧ 立った！歩いた！とみんなが祝ってくれる。 | |
| | | ⑨いない・いないパーなど、もう1回と表情、しぐさで要求する。 | | | ⑨ いない・いないパーをしてくれて嬉しい。 | |
| | | ⑩探索活動をする。 | | | ⑩探索活動を見守ってくれて嬉しい。 | |
| | | ⑪ 行動を阻止されると泣く。 | | | ⑪ トラブルがあっても「00したかったのね」と受け止めてくれる。 | |

以下の表2-3は、上記の表2-2の続きである。自己支配感Wの1歳3カ月～2歳までの年齢を表記している。

表2-3 自己支配感（1歳3カ月～2歳）

| | | | | | | |
|-------|-------|------------------------|-----------------|------------------------|---|------------------------|
| 自己支配感 | 1歳3ヶ月 | ①片言ながら口で「暑い」「寒い」など言える。 | ①自分の容貌がかわいいと思う。 | ①壊して楽しむ | ①好きな大人が受け止めてくれて嬉しい。 | ①兄弟に甘える。物の取り合いをする |
| W | ～2歳 | ②便が出たことを知らせる。 | ②自分のものがわかる。 | ②好きな遊びがある。 | ②便が出たことによって「気持ち良かったね」と言ってくれる。 | ②友達と手をつなぐ。 |
| | | ③普通の食事ができる。 | | ③体を動かして遊ぶのが好き。 | ③大人と同じものを食べて共感できてうれしい。 | ③仲間と遊ぶ。 |
| | | | | ④置き場所、寝る場所、食べる場所がわかる。 | ④受け止めてもらうことで待てたりできる。 | |
| | | ④片言と身振り手振りでいえる。 | | ⑤いろいろなものには名前があることがわかる。 | ⑤指差しに答えてもらい、物には名前があることを知り嬉しい。 | ④好きな友達ができる。 |
| | | ⑤指差しをする。 | | | ⑥受け止めてもらうことで待てたりできる。 | |
| | | | | | ⑦「そうだね」「00だね」と受け止めてくれる。 | |
| | | ⑥「もう1回」と催促をする。 | | | ⑧トラブルがあっても「00ちゃんもしたかったのね」と受け止めてくれて仲介してくれて安心 | ⑤友達のものがかかる。 |
| | | ⑦見立て遊びをする。 | | | ⑨歌ったり、音楽を聴いて一緒に口ずさむ。 | ⑥おもちゃのやり取りを大人の見守る中とする。 |
| | | ⑧「いや！」という。 | | | ⑩簡単なごっこ遊びを一緒にしてくれて嬉しい。 | ⑦泣いてる友達を「よし・よし」する。 |
| | | ⑨「自分で！」と主張する。 | | | | |
| | | ⑩ごっこ遊びができる | | | ⑪片言ながらやり取りができる。（どうぞ・ありがとう） | |
| | | ⑪自分の名前が言える。 | | | | |

以下の表2-4は、自己受容と自尊感情である。自己受容Xの0歳～2歳までと自尊感情のYの0歳から2歳の年齢を表記している。

表2-4 自己受容・自尊感情（0歳～2歳）

| | | | | | | |
|------|----------------------|--|-----------------------------------|--|---|---------------------------|
| 自己受容 | 0歳～6ヶ月 | ①W-A-1～10 喜怒哀楽を表現して満足。 | ①W-B-1～6 動いて満足。 | ①W-C-1～5 居場所があって満足。 | ①W-D-1～10 好きな大人がいて愛してくれて満足。 | ①W-E-1～3 仲間がいて安心満足。 |
| | X 6ヶ月～1歳3ヶ月 | ①W-A-1～11 一人で歩いて自由になり、探索活動が広がり、満足。 | ①W-B-1～5 活動している自分に満足。 | ①W-C-1～5 好きなおもちゃがあって満足。 | ①W-D-1～11 歩けた！みんなと共感し、自信に満ちみんなで満足。 | ①W-E-1～5 友達と一緒に笑い共感する。 |
| | 1歳3ヶ月～2歳 | ①W-A-1～11 いろんなことができることを認めてくれて満足。 | ①W-B-1～2 自分は何でもできる | ①W-C-1～5 自分はいろんなことが分かってきてやれる。 | ①W-D-1～11 大人の言うことがよくわかる。自信につながる。 | ①W-E-1～7 友達に満足している。 |
| 自尊感情 | 0歳～6ヶ月 | ①W-A-1～10 自己表現に満足。 | ①W-B-1～6 首が座り、寝返りできて満足。 | ①W-C-1～5 安心安全な場所、い場所で満足。 | ①W-D-1～10 尊敬され、愛される。ありのまま認めてもらい満足。 | ①W-E-1～3 そばにいただけで満足。 |
| | テセイルフエム 6ヶ月～1歳3ヶ月 | ①W-A-1～11 好きな遊びをし、歩行を中心に探索活動を行い認められると嬉しい。 | ①W-B-1～5 ハイハイをし、立って歩けるようになる自信。 | ①W-C-1～5 自分は好きなおもちゃで遊べる。いろんなところを探索でき満足。 | ①W-D-1～11 周りの大人に成長の節目を喜んで共感してもらって満足。 好きな大人にすごい！上手！と認めてもらおうと満足。 | ①W-E-1～5 友達と遊ぶと楽しい！満足。 |
| | Y 1歳3ヶ月～2歳 | ①W-A-1～11 見立て遊びが高まり、何事にも関心がある。 それらを受け止めてもらい満足。 | ①W-B-1～2 盛んに模倣してきた時の達成感が分かる | ①W-C-1～5 歩く、走る、とぶ、など周りの環境により行動をとる。周りが見えてくる。 | W-D-1～11 強く自分を自己主張するが受け止めてもらうことにより満足。 指差ししていろんなことを知らせる。答えてもらって満足。 | W-E-1～7 友達が好きだ。 |

表2-5

| | | | | | | |
|--------------------------------|-------------------|---|------------------|-----------------------------------|--|---------------------------|
| 可 能 的 自 己 Z | 0歳 〜 6ヶ月 | ①自分の存在、行動が受け入れられている。 | ①可愛い存在。 | ①安心安全な場所にある。 | ①好きな大人がいる。(大人と情同交流ができる。) | ①友達の行動を眺める。 |
| | 6ヶ月 〜 1歳3ヶ月 | ①喜怒哀楽のすべて表現できる ②自信を持って歩く。 | ①丸ごとの自分を認める。 | ①自由に探索できる場がある。 | ①歩く喜び、探索活動受け入れ見守ってくれる。 ②肯定的にも守ってくれる大人がいる。 | ①一緒に同じ遊びをする。 |
| | 1歳3ヶ月 〜 2歳 | ①身の回りのことを自分でしようとし、片言ながら発し、道具を使って遊ぼうとする。 | ①髪を切ってもらってより可愛い。 | ①物に名前があるのを知り、大きくなったらしいんなことができるはず。 | ①大人の気持ちを感じ、それに応じたり、行動を認められてさらに次の行動へと意欲が持てる。 | ①あこがれのなかまがいる。(好きな子のそばによる) |

こうして、表2-1~5の、乳児の「自己肯定感」をはぐくむ構造と契機を0歳~2歳を対象として、子どもの側からの行動・姿を指標として作成したものである。

結果、子どもの健やかに育つ姿が浮き彫りになったのである。筆者はこの表2-1~5からでもわかるように、自己の発達は、目に見えて誰にも感じるところは、5ヶ月終わりごろから8ヶ月にかけての人見知り、歩きだしたころの自信に満ちた顔、道具を使って押したり引っ張ったりと得意顔、自分の名前を呼ばれたら「ハイ!」と言える等、2歳までに自己が育っているのもそんな子どもたちを、周りの保育士が一人の人間として、尊敬し、大事に育てることで、初めて健やかに成長するのである。

そして、四つの自己の構造と八つの自己の契機が「自己肯定感」をはぐくんでいくと考えたのである。

乳児期の「自己肯定感」については難しく、なかなか推し量れないとされているが、筆者は、四つの構造と八つの契機から、子どもの姿を見ていくことで見えてくると思ひ、現場に行き観察し、立証を試みる。そして、「自己肯定感」指標を作成する。それを基に保育士にインタビューすることで、乳児期の「自己」の成長・変化についての研究を考えたのである。

そこで、1年間(平成23年)は月1回保育所において、乳児の主体的に行動する姿や表現を記録し、保育者の関わり方や子どもの姿を観察したのである。そして、筆者は乳児の「自己肯定感」がどのように育つのか、仮説を立てたのである。

5, 乳児の「自己肯定感」の仮説

(1) 仮説

乳児の自己肯定感を言葉で表すなら、「私は私である」「私は愛されている」「私は可愛い・私は泣いても大丈夫」「私は何でもできる」である。

そして、乳児の「自己肯定感」の育ちは四つの構造と八つの契機からなると考える。

四つの自己の構造（自己支配感・自尊感情・自己受容・可能的自己）は以下のとおりである。

- ①「私は私である」という自己支配感を認められることにより自信や安心につながり、「自己肯定感」がはぐくまれる。
- ②「自分は愛されている」という自尊感情を持つことにより、「自己肯定感」がはぐくまれる。
- ③「私は可愛い・私は泣いても大丈夫」と自己受容することにより、「自己肯定感」がはぐくまれる。
- ④「私は何でもできる」と可能的自己・自己期待を持つことにより「自己肯定感」がはぐくまれる。

八つの自己の契機（活動的自己・身体的自己・物質的自己・能力的自己・社会的自己1・社会的自己2・精神的自己・全体的自己）は以下のとおりである。

- A、生活や遊びを通しての活動的自己
- B、自分の容貌、身体的な特徴な身体的自己
- C、自分の持ち物、場所などの物質的自己
- D、言葉などの能力的自己
- E、大人との関係を社会的自己1
- F、仲間との関係を社会的自己2
- D、嬉しい、楽しい、つらい、等、気持ちを表す精神的自己
- H、総合的に捉えて全体的自己

乳児期での自己を押し量ることは難しいといわれているが、子どもの姿を四つの構造と八つの契機から見ていくことで、乳児の「自己肯定感」が見えると考えて仮説とする。

(2) 仮説の考え方

私は私である（自己支配）は、日常の保育の中で、特に昼食時などに、ふと子どもがスプーンを叩くと仲間が一斉に面白がって叩いたり、お絵かきをするとき「トン・トン」と誰かが始めると、にぎやかにトントンコールが始まったりする。又、スープを飲むときに、コップでうがいした時のように「ガラガラ」と一人がすると仲間もする。自分のした行為を周りも真似をして、同じようにしてくれると自分が周りを動かしているように思うのである。ここで自己支

配感が育っていると考えられる。このように、日常生活の中で繰り返し行われる活動を通して、自分の行為が認められたりすることによって自信や安心感につながるのである

また、「私は私である」ということは永遠に難しいテーマであると考え、子どもが誕生し親は思いや願いをこめて名前をつけるのである。そして、愛情を持って「00ちゃん」と数えきれないくらい人生の中で声をかけてもらうのである。そんな「00ちゃんである私」「自分の思いを出せる私」「保育士や周りの人と生活や遊びを共にできる私」「仲間と一緒に遊べる私」なのである。

一人の人間としてしっかり主体的に生きることが「自己肯定感」につながると考える。食べることや遊ぶこと、大人や仲間とかかわることなどのなかにそれはある。これらは八つの自己の契機（A～H）が基になっているのである。それは日々の中で、自分は食事の時・スプーンやフォークを使って自分で食べようとしたり、これ見よがしに歩いたり、自分の服は自分のものだと執着したり、指差し、簡単な言葉で相手に伝えようとしたり、自分は先生と遊ぼうとしたり、先生を介して仲間と遊ぼうとしたり、自分は嫌なことは「イヤ」と気持ちを表したり、自分はこうして自己主張をし、大人を動かしているのである。

体の成長や心の成長は、日々の生活や遊びを通して、人・物・環境にかかわり、自分が主体的に活動していくことを認められることによって、自信となり、「自己肯定感」が育まれていくのである。

私は愛されている（自尊感情）は自分に対する肯定的なイメージ・自分を大切にしようとする気持ちである。

周りから愛され、情緒が安定することである。生まれてから大事に育てられ、オッパイやミルクを飲み、「首が据わった!」「ハイハイした!」「立った!」「歩いた!」と周りは一喜一憂して成長を喜んでくれ、子どもは認められていくのである。そんな生活や遊びの中で子どもは自信や達成感が生まれてくる。これも八つの自己の契機（A～H）が基となる。それは、自分は一人でスプーンやフォークを使って食べることが好きだったり、これ見よがしに歩くことが得意だったり、おもちゃを使うのが得意であったり、片言の言葉を発する事が出来て誇りに思ったり、スキンシップをしてくれる、優しい先生は好きであり、友達に好かれて誇りに思ったり、いろんなことが出来るようになり、誇りに思うのである。

自己支配感のところで事例を出していたが、食事の時、汁物でガラガラうがいをしてしまう。すると行儀が悪いので、保育士は、「ダメ!」と頭ごなしで言うのか、「スープは飲むものよ。ごはん食べた後に、お水でガラガラうがいをしようね。」と促す方法で接するのか、言い方として良い悪いでなく、子どもの受け止め方がずいぶん違ってくるのではないかと考える。

子どもは、いろいろやってみて確かめているのである。こうした日常生活や人間関係の中で遊びを通して、いろいろなことを受け止めてもらい大人との安定した関係から、やがて仲間を目を向けていくのである。気に入った仲間ができるといつもそばにくっついているのである。

しかし、しんどい状況におかれている子どもは活動そのものについていけず自信もなく、敗北感等、味わっていき自己の存在感すら希薄になってしまうのである。そうすると自分は愛されていないのではないかと不安をだき「愛されていないかも」と思うのである。こうした子どもの心を開き自信を持たせていくには、何よりも「受け入れる」「認める」「大切にする」という大人の関わりがあって初めて「受け入れられている」「認められている」「大切にされている」と感じるのである。

私は可愛い・私は泣いても大丈夫（自己受容）は、自分に満足していることである。

大人の行動、しぐさを真似する子どもたちは、ぬいぐるみを赤ちゃんに見立て、ミルクを飲ませ母親になったつもりで満足している。おもちゃの流し台で洗い物をしている姿を見ると、おもちゃをガラガラさせ、音だけ出して食器を洗っている様子を表している子どもに「お茶碗を洗ってるの？お母さん見たい」というと「こっくり」とうなずき満足している子ども。おもちゃのバギーにお人形を乗せて押している満足顔、自己主張をして認められることによって満足顔。歩けるようになってみんなに認めてもらって満足。積木を積んで、ほめられた自分の能力に満足。自分で「00可愛い！」と言って満足。自己受容は、親・先生・仲間と遊べて嬉しい楽しいと思っている自分に満足していることである。八つの自己の契機（A～H）が基となり、自分は一人でスプーンやフォークを使って食べることに満足だったり、歩けることに満足、片言の言葉を発する事に満足、自分を大事にしてくれる先生に満足、好きな友達がいて満足、驚きや感動を共感してくれる人がいて満足。自分は受け入れられて満足なのである。

私は何でもできる（可能的自己）は、こんな活動はチャレンジできるはずと思うことである。

フォークやスプーンを持ってたべようとチャレンジしたり、歩けるようになるとどこへでも探索したり、「ダメ！」といわれても自分が納得するまで「イヤ！」と言い、精いっぱい反抗して駄々をこねるのである。このような形で「自我」が芽生えてくるのである。又、手先も器用になり、道具を使って遊ぼうとしたり、生活の面では、衣服を着脱しようとしたり、自我の芽生えを基に「自分で！」と身辺自立をしようと、日々チャレンジしているのである。簡単な言葉で相手に伝えようとチャレンジしたり、先生にほめられるとさらにチャレンジしたり、自分は好きな仲間と遊ぼうとチャレンジしたり、「ダメ！」と禁止されても、又チャレンジしようとするのである。自分はいろんなことが出来るようになりさらにチャレンジするのである。可能的自己も八つの自己の契機（A～H）が基になっているのである。

（3）乳児の「自己肯定感」指標の作成

1年目（平成23年）0歳児クラスの子ども達を対象に、遊びや食事場面で、主体的行動している子どもの姿と保育者の関わりを観察し、予備調査を行い、2年目（平成24年）には子どもたちに接している1歳児クラスの保育者にインタビューして、子どもの自己の成長を聞き取り調査するための調査票として、乳児の「自己肯定感」指標を作成した。それを使って、「1

歳児の自己肯定感について」乳児教育保育学会や、日本保育学会で発表してきたのである。

今回は「0歳児の自己肯定感について」、四つの**自己の構造**（自己支配・自尊感情・自己受容・可能的自己）と、生活や遊びを通しての**A, 活動的自己**、自分の容貌、身体的の特徴などの**B, 身体的自己**、自分の持ち物、場所などの**C, 物質的自己**、言葉などの**D, 能力的自己**、大人との関係の**E, 社会的自己1**、仲間との関係の**F, 社会的自己2**、嬉しい、楽しい、つらい等、気持ちを表す、**G, 精神的自己**、総合的にとらえて**H, 全体的自己**に分類し上記の**八つの契機**で「0歳から1歳3カ月」までの観察の尺度として子どもの行動、気持ちを表した「自己肯定感」指標（表3）を作成したのである。

6. 乳児の「自己肯定感」のアンケート調査

3市で、四件法（そう思う4点、どちらかというと思う3点、どちらかというと思う2点、思わない1点）で点数化する。乳児の「自己肯定感」指標（表3）を使って0歳から1歳3カ月の子どもを対象として0歳児の保育士にアンケートを行った。

(1) 調査の方法

3市の民間保育園で乳児の「自己肯定感」指標を使って、0歳から1歳3カ月の子どもを対象とする。

- ① 令和3年11月（A 保育所・B 保育所・C 保育所）
- ② 対象児 0歳～1歳3カ月 各施設（7人）合計21人
- ③ 保育士にアンケート（複数人で読み取り確認）
- ④ 4件法による

(2) 結果

表3の乳児期の「自己肯定感」指標（0歳から1歳3か月）の得点の高かった項目は「自分は受け入れてくれる人が好きである」「自分はみんなに愛されている」「自分は物にさわったり、握ったり落とそうとしたりする」「自分は寝がえり、ハイハイ、歩こうとチャレンジする」であった。

後は、自己の構造と自己の契機から考察をはかる。

表3 乳児期の「自己肯定感」指標（0歳から1歳3か月）

| | | 乳児期の「自己肯定感」指標（0歳から1歳3か月） | | | 合計 | | |
|--|-----------------------|-------------------------------|--------------------------|-----------------------------------|----|--------------|----|
| | | そう思う （4点） | どちらかとい うとそう思う （3点） | どちらか というそ う思わな い（2 点） | | 思わない （1点） | |
| | | 対象年齢月（0歳から1歳3ヶ月） N=21 | | | | | |
| | | 令和3年5月～6月 0歳児クラス | | | | | |
| 私は 私 で あ る | 自己 支 配 感 | 自分は良くおっぱい（ミルク）を飲み、食べようとする。 | 68 | 6 | 4 | 0 | 78 |
| | | 自分は、手や足を使って自分の体を動かそうとする。 | 68 | 6 | 2 | 1 | 77 |
| | | 自分は物に触ったり、握ったり、落とそうとしたりする。 | 68 | 9 | 2 | 0 | 79 |
| | | 自分は表情、仕草で相手に伝えようとする。 | 56 | 21 | 0 | 0 | 77 |
| | | 自分は先生の真似をしようとする | 40 | 18 | 6 | 2 | 66 |
| | | 自分はそばにいる子が気になり触ったりしようとする。 | 56 | 3 | 8 | 2 | 69 |
| | | 自分は人見知りをして泣いたりする。 | 44 | 12 | 8 | 1 | 65 |
| | | 自分は泣いたり、笑ったりして大人を動かしている。 | 60 | 15 | 2 | 0 | 77 |
| 小計 | | 460 | 90 | 32 | 6 | 588 | |
| 私は 愛 さ れ て い る | 自 尊 感 情 | 自分は飲んだり、食べたりすることが好きである。 | 64 | 9 | 4 | 0 | 77 |
| | | 自分は、手や足を使って自分の体を動かすことが好きである。 | 64 | 6 | 6 | 0 | 76 |
| | | 自分はおもちゃで遊ぶことが好きである。 | 60 | 12 | 4 | 0 | 76 |
| | | 自分は表情やしぐさで相手に伝えることができ誇りに思う。 | 32 | 36 | 0 | 1 | 69 |
| | | 自分が笑う笑顔で返してくれる先生が好きである。 | 68 | 6 | 2 | 1 | 77 |
| | | 自分は周りに友達がいることは好きである。 | 48 | 21 | 2 | 1 | 72 |
| | | 自分は受け入れてくれる人が好きである。 | 80 | 3 | 0 | 0 | 83 |
| | | 自分はみんなに愛されている。 | 76 | 6 | 0 | 0 | 82 |
| 小計 | | 492 | 99 | 18 | 3 | 612 | |
| 私は 可 愛 い 私 は 泣 い て も 大 丈 夫 | 自己 受 容 | 自分は飲んだり食べたりして満足している。 | 64 | 9 | 4 | 0 | 77 |
| | | 自分は、手や足を使って自分の体を動かすことに満足している。 | 56 | 12 | 6 | 0 | 74 |
| | | 自分は好きな遊びがあり満足している。 | 52 | 15 | 6 | 0 | 73 |
| | | 自分は、表情、仕草で相手に伝えて満足している。 | 40 | 30 | 0 | 1 | 71 |
| | | 自分は先生に可愛がってもらって満足している。 | 52 | 24 | 0 | 0 | 76 |
| | | 自分は友だちが気になり触ると満足している。 | 52 | 15 | 2 | 2 | 71 |
| | | 自分は共感してくれる人がいて満足している | 56 | 21 | 0 | 0 | 77 |
| | | 自分は泣いたらかまってくれるので大丈夫と思える。 | 40 | 30 | 2 | 0 | 72 |
| 小計 | | 412 | 156 | 20 | 3 | 591 | |
| 私 は な ん で も で き る ・ 自 己 期 待 | 可 能 的 自 己 | 自分は手づかみでも食べようとチャレンジしようとする | 56 | 12 | 2 | 2 | 72 |
| | | 自分は寝返り、ハイハイ、歩こうとチャレンジする。 | 68 | 9 | 2 | 0 | 79 |
| | | 自分はいろいろな玩具に触りチャレンジしようとする。 | 64 | 6 | 6 | 0 | 76 |
| | | 自分は表情、仕草で相手に訴えようとチャレンジとする。 | 56 | 18 | 0 | 1 | 75 |
| | | 自分は好きな先生に関わろうとチャレンジしようとする。 | 52 | 21 | 2 | 0 | 75 |
| | | 自分は気になる仲間に関わろうとチャレンジしようとする。 | 40 | 21 | 4 | 2 | 67 |
| | | 自分は愛され、安心してチャレンジしようとする | 56 | 15 | 4 | 0 | 75 |
| | | 自分は愛容され、安心して何事にもチャレンジしようとする。 | 60 | 12 | 4 | 0 | 76 |
| 小計 | | 452 | 114 | 24 | 5 | 595 | |
| 合計 | | 1816 | 459 | 94 | 17 | 2386 | |

(3) 自己の構造の全体考察

4つの自己の構造の得点率から考察すると四つの構造ではあまり変化はなく、全体の平均の88%前後であった（表4）。

自己の契機の得点率から考察すると精神的自己・能力的自己・社会的自己1・社会的自己2は差が認められた。自己の契機については、得点率90%をこえていないものは精神的自己（82%）、能力的自己1（86%）社会的自己1（87%）社会的自己2（88%）であった。今後、発達していく通過点ではないかと考える（表5）。

表4 自己の構造

| 自己の構造 | 全体21(100%) | |
|-------|------------|-----|
| | 平均 | % |
| 自己支配感 | 28.0 | 87% |
| 自尊感情 | 29.0 | 90% |
| 自己受容 | 28.0 | 87% |
| 可能的自己 | 28.0 | 87% |
| 全体の平均 | 28.0 | 88% |

表中%は得点可能最大値 21 に対する得点の比率（百分比）を示す。

表5 自己の契機

| 自己の契機 | 全体21(100%) | |
|--------|------------|-----|
| | 平均 | % |
| 活動的自己 | 14.4 | 90% |
| 身体的自己 | 14.5 | 90% |
| 物質的自己 | 14.4 | 90% |
| 能力的自己 | 13.9 | 86% |
| 社会的自己1 | 14 | 87% |
| 社会的自己2 | 14.2 | 88% |
| 精神的自己 | 13.2 | 82% |
| 全体的自己 | 14.2 | 88% |

注 表中%は得点可能最大値 21 に対する得点の（百分比）を示す。

表4の自己の構造から、得点の高いほうから考察すると

- ① 「私は愛されている」（自尊感情）の得点率は90%である。

自分は受け入れてくれる人は好きであり、自分は愛されていること、自分は寝返り、ハイハイをし歩こうとチャレンジする。自分は共感してくれる人がいて満足している。

子どもは、この世に生を受けて「まあ可愛い！」と受け入れてもらい、周りは誕生を喜び、「私」の存在を認め、大事に育てられているのである。

- ② 「私は私である」（自己支配感）は、得点率は87%である。

自分は物に触ったり、握ったり落とそうとする。自分はおっぱい、ミルクを飲み、食べようとする。自分は泣いたり、笑ったりして大人を動かしている。

優しく抱かれて、温かいまなざしで、成長を見守ってくれる環境は子どもにとってこの上なく幸せで「お母さんのようになりたい」と後ろ姿を見て歩こうと真似ているのであろう。

歩きだしたら、これ見よがしに歩く姿は堂々と自分は「一人の人間としてしっかり生きているよ！」とアピールしているのである。

まさに「自己肯定感」がはぐくまれている大きな子どもの行動の一つではないかと考える。

- ③ 「私は可愛い・私は泣いても大丈夫」（自己受容）は（自己支配感）と同じく得点率87%である。

自分は大事にしてくれる先生に満足し、驚きや感動を共感してくれ、泣いても「大丈夫！」と受け入れてくれる先生が好きで満足しているのである。

④ 「私は何でもできる」(可能的自己・自己期待)も同じく87%である。

自分は寝返り、ハイハイ、歩こうとチャレンジしているのである。少々のことではへこたれず、積極的にそれぞれがチャレンジしているのである。この時期ならこそ、歩きかけると歩くことに夢中になるのである。

(4) 自己の契機の全体考察

表5の自己の契機の得点の高い方から考察すると

① **活動的自己**は得点率90%である。

「自分は良くおっぱい(ミルク)を飲み、食べようとする」得点は、「どちらかというと思う」を入れて得点率は高い。この時期は特定の人との関係で安心して身をゆだね、おっぱいを飲んだり、ミルクを飲んだり、飲む行為をする時期であり、又、離乳食が始まると、素材に慣れることや、スプーンなど持ち始める。食欲のある子は手づかみでも食べる。食に対しては変化のある時期であり、子ども刺激を受けながら意欲的になる。中には、個別に配慮の必要なアレルギー症児などには注意する必要がある。

② **身体的自己**も得点率90%である。

この1年の成長は早く、首が座る、寝返りする。はいはいする。つかまり立ちする。歩こうとする。発達の質的転換期と考えられる。つかまり立ちしながら手を放し一歩、一歩、進み、転んでもまた、立ち上がり歩こうとする、最も人間らしい力が全面でている時期でもある。自分で歩いて方でバランスをとって歩いている姿は本当に自信に充ち溢れ、自分を信じて、しっかり歩こうと肯定し、「この世界は私のもの」と言わんばかりに大人の顔を見ながら、あちこちと探索活動をしているのである。又、周りも歩けたことにより、喜び、歩くたびにほめたたえ、子どもの成長をみんなで、祝うのである。本人自身も認められることにより成就感・達成感・満足感を覚え、自己肯定感がはぐくまれていると考えられる。

③ **物質的自己**も同じく得点率90%である。

「自分は物に触ったり、握ったり、落とそうとする。」「自分はおもちゃで遊ぶことが好きである。」「自分は好きな遊びがあり満足している。」「自分はいろいろな玩具に触りチャレンジしようとする。」など、発達の特徴として、自分の手足を触りながら、また次第に周りの玩具にも興味を示しなめたり、触ったりと確かめながら、行動範囲も広がって、探索活動へと行動が活発になるのである。

④ **全体的自己**は得点率 88%である。

「自分は泣いたり笑ったりして大人を動かしている。」は一人だけどちらかというところを思わないであったが、後の 20 人は、どちらかというところを思っても含めてそう思うのであった。「自分はみんなに愛されている。」ほぼ全員そう思うのであった。「自分は泣いたらかまってくれるので大丈夫と思える。」は一人以外全員そう思うのである。「自分は受容され、安心して何事にもチャレンジしようと思う。」どちらかというところを思わない二人以外は全員そう思うのであった。一人、得点が低かったのは養育者の子育てに対するしんどさが現れていたためである。

⑤ **社会的自己 2**は得点率 88%である。

「自分はそばにいる子が気になり触ったりしようとする」「自分はまわりに友達がいることは好きである。」「自分は友達が気になり触ると満足している。」「自分は気になる仲間に関わろうとチャレンジしようとする。」

⑥ **社会的自己 1**は得点率 87%である。

「自分は先生の真似をしようとする。」「自分が笑うと笑顔で返してくれる先生が好きである」「自分は先生に可愛がってもらって満足している。」「自分は好きな先生に関わろうとチャレンジしようとする。」

1 人を除いて「どちらかというところを思っても含めて得点が高いのである。これはまだまだ、乳児期にとっては先生が関わってくれ、受け止めてくれることが何より大事なことであり、そのことで安心して、自分の気持ちを表すことができ、子どもの心の基盤となると考えられる。

⑦ **能力的自己**は得点率 86%である。

「自分は表情、仕草で相手に伝えようとする。」「自分は表情やしぐさで相手に伝えることにより誇りに思う」「自分は表情やしぐさで相手に伝えて満足している。」「自分は相手に表情やしぐさで訴えようとしてチャレンジする。」「訴えようとしていて「そう思う」が多いが、一部、「そう思わない」子どももいる。まだこれから言葉の出る時期であり、これから育っていくのではないかと読み取れる。

⑧ **精神的自己**は、得点率 82%である。

「自分は人見知りをして泣いたりする。」「自分は受け入れてくれる人が好きである。」「自分は共感してくれる人がいて満足している」「自分は愛されていて安心してチャレンジしようとする。」この先、1 歳半ぐらいになると自我の芽生えが出てきて「自分で」という意識が

出てくる時期で、気に入らないことがあると「イヤ！」と反応していくのである。

この時の大人の対応が子どもの気持ちに寄り添った関わり方をする事によって子どもは受容され受け入れてもらったという自信にもなることもあるが、逆に「聞き分けのない子」「ダメな子」「嫌な子ねえ」と否定的に言われ続けると、だんだん「自分はダメの子」と、思い込んでしまい自己否定し、「自己肯定感」がはぐくまれないと考えられる。

7. まとめ・今後の課題

仮説の「**私が私である**」は、自分に名前がつけられ、「00ちゃん！」と小さいころから優しく声をかけてもらい、自分は大切な存在である「私」なんだという感覚は、無意識のうちに周りから映し返しとして受け取っているのである。大切に保育されることで、「**私は愛されている**」「**私は可愛い**」と、自分はかけがえのない存在であることを自分なりに肯定する感覚を覚え、泣いても受け止めてもらえる経験をする事で「**私は泣いても大丈夫!**」と思うのである。いろいろな経験を通して、周りから「失敗しても大丈夫だよ」というメッセージを多く受け止めることにより、「**私は何でもできる**」とさらにチャレンジし、自分のことが好きになるのである。逆のかかわり方であれば当然、自己否定に陥ることは多くの先人が言ってきていることである。

又、4. 乳児の「自己肯定感」をはぐくむ構造と契機は、子ども側からの成長であり、そこには0歳児であっても、しっかりと泣き笑い等、自己表現し、1歳半ぐらいからは、ますます自分の意思を出し、自己主張が目立ってくる。2歳を迎えるころはさらに、言葉も出るようになり、自分の名前言うことができ、相手に対して言葉で、思いを出せるのである。この時期こそ、子どもの自己主張や感情を十分に受け入れ、共に喜び、**共感できる関係**をつくることで、「自己肯定感」がはぐくまれているのである。

子どもは、一人の人間として尊敬され、健やかに成長することがいかに大切であるか、乳児期こそ「生きる力」の源である安心感や「自己肯定感」を大事にすべき時期である考える。「自己肯定感」は、自分らしく人間として生きるために年齢に関係なく生涯にわたり基本的な大切な気持ちであると考ええる。

乳児期の「自己肯定感」指標を作成し、保育士にアンケートを取って得点化した調査結果を見ると、能力的自己・精神的自己には差が見られたが、これらは自己の成長の今後の発達していく通過点であると考ええる。なによりも得点が高かった自尊感情の「自分は受け入れてくれる人が好きである」「自分は愛されている」や次に高かった「私は何でもできる」という可能的自己、自己期待の「自分は寝返り、ハイハイ、歩こうとチャレンジしようとする」などに注目したい。そこには「自分は共感してくれる人がいて満足している。」という当たり前のことであるが養育者との好ましい関係が大切さであることが確認することができた。

自己の構造と自己の契機から作った指標を、これからも検討を重ねて作成し、乳児の「自己

肯定感」の尺度のひとつとして、子どもたちの成長を確認していく指標になれば、保育の質も変わっていくのではないと思われる。

今後、乳児の育ちとして2歳以上の子どもを調査し、自己の育ちを横断的・縦断的に見ていくことや母親との関係も含めた乳児の「自己肯定感」についての調査も必要であると考えます。

引用・参考文献

- 天野祐子 (2003) 「私への「なぜ」という問いー自我体験ーVOL50
- 今井和子 (1998) 「0・1・2歳児の心の育ちと保育」: 小学館
- 今井和子・榊原洋一 (2010) 「乳児保育の実践と子育て支援」: ミネルヴァ書房
- 今井和子 (1997) 自我の育ちと探索活動: ひとなる書房
- 今井和子・波多野ミキ・堀内節子 (2010) 「自己肯定感の育て方」: 本の木
- 宇佐美百合子 (1999) 「あなたはあなたのままでいい」: PHP 研究所
- 植村美民 (1975) 「乳児期におけるエゴ (e g o) の発達について
- 大方美香 (2006) 「乳幼児教育学」: 久美株式会社
- 梶田叡一 (2002) 「自己意識の心理学」: 東京大学出版会 p 127
- 柏木恵子 (2003) 子どもの「自己」の発達: 東京大学出版会
- 柏木恵子 (2012) 「発達の心理学」 p 28
- 鯨岡峻 (2011) 「保育・主体として育てる営み」: ミネルヴァ書房 p 80
- 鯨岡峻 (2011) 「子どもは育てられて育つ」: 慶應義塾大学出版会株式会社
- 小林芳夫 (2006) 「子どもと保育の心理学」: 保育出版社
- 小林芳夫 (2010) 「発達のための臨床心理学」
- サリー・ワード (2011) 「語りかけ育児」: 翻訳 榎朝子 小学館
- 坂上裕子 (2012) 「幼児は自己や他者に対する理解をどのように構築するのか」 乳幼児教育学研究 21 号
- 玉置哲淳 (1998) 「人権保育のカリキュラム研究」: 明治図書 p 307・ p 308・ p 309・ p332・ p338
- 玉置哲淳・堀井二美 (2010) 「2歳児の人権保育」: 解放出版
- 高垣忠一郎 (2011) 「生きることと自己肯定感」: 朝日日本出版社
- 野沢祥子 (2011) 「1～2歳の子どものやり取りにおける自己主張の発達の变化」
- 平野直樹 (2010) 「自己肯定感を育てる」: 金子書房
- 古荘純一 (2009) 「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」: 光文社
- 保育所保育指針解説書 (2008) 24、62 - 64 116-117
- 保育所保育指針 解説書 (2018)